

試験研究成果普及情報

部門	野菜	対象	普及
課題名：イチゴの中休みの発生要因と対策			
[要約] 基肥窒素過多、腋花房分化後の窒素不足、腋花房分化前後の高夜温、過重な着果負担によって収穫の中休みが助長される。中休み対策として、基肥窒素を10kg/10a程度とし、腋花房分化後に窒素を追肥する。小苗を定植する場合は摘花をして着果負担を軽減する。			
キーワード イチゴ、中休み、施肥、夜温			
実施機関名 主 査 農業総合研究センター生産技術部野菜研究室 協力機関 (独)野菜茶業研究所 他			
実施期間 2002年度～2004年度			

[目的及び背景]

イチゴ経営では11月から5月まで連続的に収穫が続くことが望まれるが、一時的に収量が減ってしまう中休み現象が発生して問題となっている。そこで、その対策を検討する。

[成果内容]

- 1 基肥窒素量10kg/10aに対し、20kg/10aでは花房間葉数が増加し、中休みが助長される(図1)。
- 2 第一次腋花房分化直後に10kg/10aの窒素追肥を行うことで、無追肥に比べ、第一次腋花房の開花が早まり、中休みが軽減される(図2)。
- 3 第一次腋花房分化前の夜温が25℃になると、腋花房分化は遅延しないものの、夜温15℃に比べて頂花房花数が減少する(図3)。
- 4 第一次腋花房分化後の夜温が25℃になると、腋花房の発達が抑制される(表1)。
- 5 定植時展開葉数が2枚程度の小苗の場合、頂花房を3花に摘花することで第一次、第二次腋花房が連続的に収穫できる(図4)。

[留意事項]

- 1 基肥窒素量20kg/10aによる腋花房分化遅延は、速効性肥料主体の施肥による結果であり、緩効性の有機質肥料などを用いた場合はこの限りでない。

[普及対象地域]

県内全域のイチゴ栽培者

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

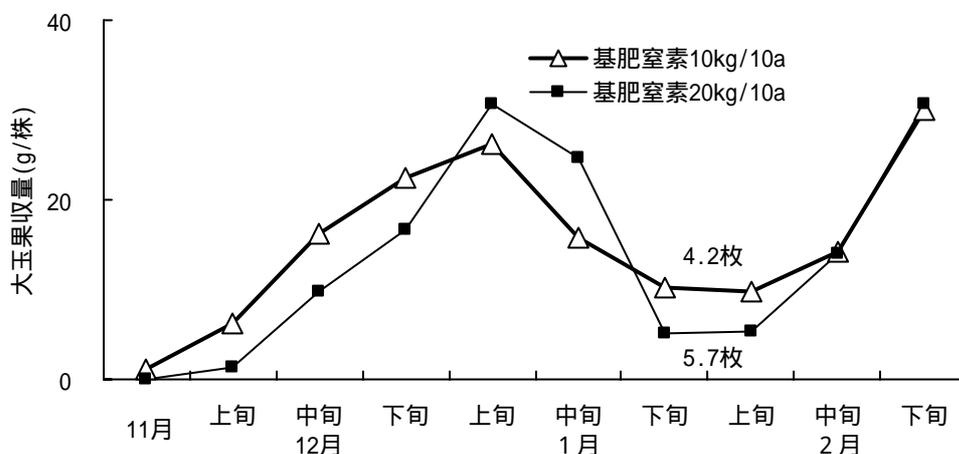


図1 基肥窒素量が異なる「とちおとめ」の大玉果(12g以上)収量の推移と花房間葉数
注) 基肥窒素は、アンモニア態窒素：CDU窒素を1：1とした。

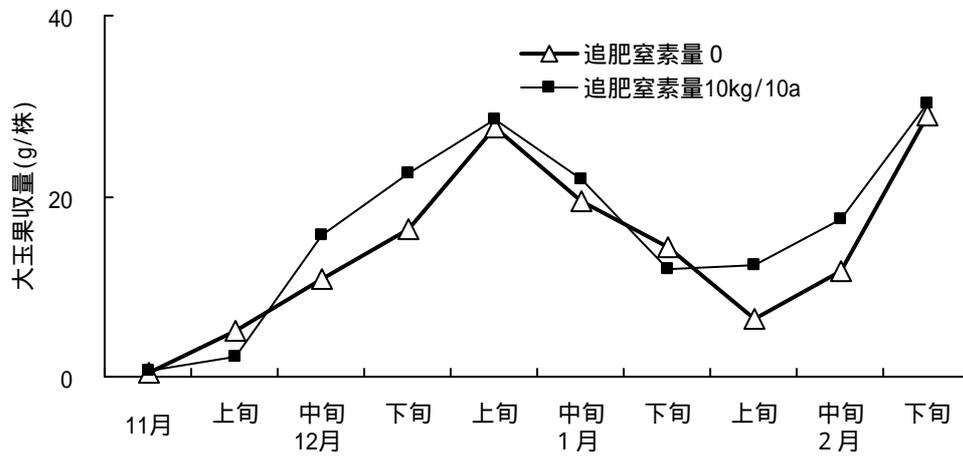


図2 腋花房分化後の追肥窒素量が異なる「とちおとめ」の大玉果(12g以上)収量
 注) 基肥窒素量は10kg/10aとし、基肥、追肥ともにアンモニア態窒素：C D U窒素を1：1とした。

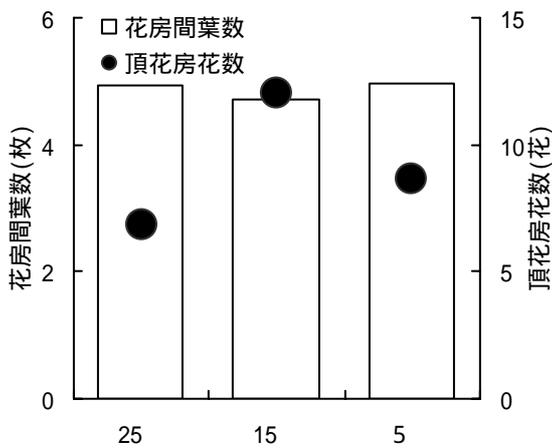


図3 頂花房分化後の夜温が異なる「とちおとめ」の頂花房 - 第一次腋花房間の花房間葉数

表1 腋花房分化後の夜温が異なるイチゴの腋花房開花状況

品種	夜温 ()	11月22日		12月25日
		開花株率 (%)	花数 (花/株)	開花株率 (%)
とちおとめ	25	39	6.0	50
	15	78	9.3	89
	5	0	0	17
ふさの香	25	56	5.0	61
	15	67	7.8	83
	5	100	8.0	100

注) 12月25日の開花株率は、11月22日に開花していた株のみを調査した。

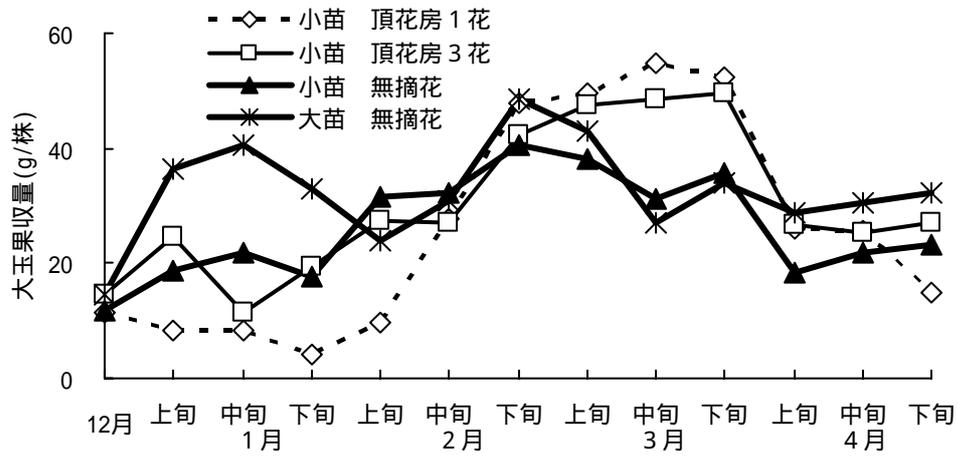


図4 頂花房の摘花程度が異なる「とちおとめ」無仮植苗の大玉果収量

[発表及び関連文献]

園芸学会平成14年度秋季大会口頭発表

園芸学会平成16年度秋季大会口頭発表

[その他]